

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.11

学校の椅子は、独自の歴史と様式を持っている。

公園のベンチでもなく、病院の待合室のソファでもない
列車の座席とも違っている。

あの硬いひんやりとした感触のなかに
時間の記憶がひそんでいて
懐かしむおとなも少なくないだろう。

床に座ることが日常だった日本人にとって
身体をひとつの姿勢に押し込めたのもこの椅子だ。

また、教壇と椅子の空間的な配置は
おとなと子どもの関係を
立つ人（先生）と座る人（生徒）の関係に変えてしまった。

だが、そろそろこの学びのスタイルから
脱してもいいのではないか。
「椅子を必要としない学校」があってもいい。

そのときは、もう「学校」という言葉すら
必要ないかもしれないが……



風の便り

7月27日(日)に行われた「風と雲の広場」では、安野侑志さんによる紙芝居を京大紙芝居研究会がサポートしました。また、江角陸さんの万華鏡とブーメラン作りや、お昼には地元の皆さんにより「野童太鼓」が披露されました。この他「チャオ！」の広場では、たくさんの文具やおもちゃが所狭しと並べられ、子どもたちは真剣に交換品を選んでいました。ここでは京大紙芝居研究会員の馬場智子さんによる参加記を紹介します。



「インタラクティブ」の面白さ——紙芝居の口演と創作に立ちあって

馬場智子 Satoko BABA 教育学研究科博士1回生

駅から見える溪流や小学校までの山道が母の郷里によく似ていたせいか、童仙房は初めて来たのになぜか懐かしい感じがする場所でした。これまで、紙芝居がメインのイベント、いわば紙芝居目当てに来た人たちの前で演じることがほとんどで、今回の「風と雲の広場」での口演とワークショップは「楽しんでもらえるかな…」と不安でしたが、車窓からの懐かしい景色を見ているうちにそんな気持ちは消えていきました。

今回の口演は『黄金バット』など懐かしの演目でした。テレビと違って紙芝居の絵は動きませんが、その代わり皆さんの反応をダイレクトに反映し、ときにアドリブを交えながら話を進めます。初めはじっと見ているだけだった子たちも、次第に主人公の行動に反応したりつっこみを入れ始めるようになりました。何より印象的だったのは、大人の方々の無邪気な（すみません）笑顔でした。なぞなぞの時、子ども以上に真剣に考え、また答えを楽しんでいる様子を見ていると、元々、街頭紙芝居のもっていたワクワク感を少しは伝えることができたのかなと嬉しくなりました。さらに、子どもたちの作る4コマ紙芝居では、ここで一人一人紹介したいぐらい個性的なお話を創ってくれました。ですが最初「好きに描いて」が難しいという子が何人もいたのが印象的でした。いったん描き始めると4コマで収まりきれない情熱があふれてくるのですが…。

今回「風と雲の広場」では、改めて紙芝居の「インタラクティブ（双方向性）」の良さを見直すことができました。口演と創作の両方をするのは実は少ないのですが、自分の気持ちを発することの楽しさ、人の思いを聞くことの面白さ、両方を一度に味わえた今回の経験は、私たち京大紙芝居研究会にとっても実りあるものでした。

雲の便り

「新しい地域社会を考える！開拓地・童仙房」——ラジオで放送

7月15日(火)～19日(土)、ABC朝日放送のラジオ報道番組「おはよう！ニュース探偵局」にて、早朝5分間の連続シリーズで童仙房の取り組みが紹介されました。リポーターは阿部成寿記者でした。高齢化に悩む山あいの町や村で「村おこし」が課題となるなか、なぜ大学や企業、市民団体などが童仙房に注目するのかを探ったものでした。

童仙房が明治期の開拓以来人々が移住してきた土地柄であり、外からの者を受け入れる気風があることや、協力して生きてきた人々の結束力の強さなど、独自の視点でその問いに迫っています。京都大学との生涯学習の取り組みも、これまでの経緯が紹介され、地元で採れた野菜を素材に音にこだわる料理を味わうという企画やささまざまな人たちが行きかう「風と雲の広場」などが取り上げられました。また、自然から学ぼうと都市の大人や子どもたちに呼びかけ森のなかでさまざまな活動をしている「生活クラブ大阪」の取り組みも紹介されています。

これらの活動からもたらされる新しい人と人とのつながりは、住民からは見えにくい地域の良さを逆に気づかせてくれることにもなっているようです。そして、童仙房から見える農業の課題は、過疎に苦しむ全国の地域の諸問題を考える原点にもかかわってくる問題ではないかという提起でしめくられました。詳しい内容は、朝日放送（ABCラジオ）のホームページをご覧ください。

(安川由貴子)



今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：教育実践コラボレーション・センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学研究科
TEL：075-753-3075、URL：<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/collabo/>

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2
会長 中村富士雄／副会長 西村秀俊

2008年11月19日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科
教育実践コラボレーション・センター
「教育空間創造ユニット」
編集：前平泰志
編集協力：生駒佳也
制作：(株)松籟社

大学は地域と結べるか——声とまなざしの行方

「京大」はまだ「小学校」を中心に半径数百メートルの範囲内しか野殿・童仙房を知りません。直接お話を伺う機会があればとかねがね願っていました。以下の報告は、収穫たけなわの頃、雨の中を学部の異なる1回生3人が自転車で地域を駆けずり回った際の感想です。「地域に可能な限りの共感を持ってまなざしを向け、地域の人のお話にもよく耳を傾けよう」そのような姿勢で臨んだ彼ら学生たちは意外な発見をします。「知る」「わかる」ということは、写真のなかの学校の階段に貼り付けてあるような、段階が上がれば桁が上がっていくようなものなののでしょうか。もしそうなら、その最上段は何なののでしょうか、どこに繋がっていくのでしょうか。声とまなざしはどちらの側からどちらの側へ発せられているのでしょうか。その様な問いを彷彿とさせる問いかけが1回生らしい文章で表されています。

三谷 明 Akira MITANI 工学部1回生 辻 誠士郎 Seijiro TSUJI 医学部 1回生
横田 航 Wataru YOKOTA 経済学部1回生

象徴としての学校

かつて山のふもとと童仙房を結んだのは、曲がりくねった山道でした。荷物を運ぶ牛車と共に多くの人が行き来していたそうです。ここが、子どもの登下校にも使われていました。学校が山に出来た時は、これ以上大変な思いはせずにはすむと喜びあいました。お話を伺ったお宅は、小学4年生までは童仙房の学校に、次の年からは山の下の学校へ通学。そして、中学卒業を前にして、新たに山に中学校が出来たものの、すぐには使えず、近くの公民館がとりあえずの学校となって、学校に掃除に出向く毎日でした。それでも、学校が出来たことで心を弾ませていたそうです。

このように、野殿・童仙房の人々は教育の場が移りかわった歴史を持っています。人々は教育に何を求めて、学校にこだわったのでしょうか。学校ができた時、なくなった時の両方を経験した野殿・童仙房と、学校教育の象徴であり続けた京都大学。この二つが向き合ったとき、それぞれが何を感じ取り、何を見るのでしょうか。

(三谷明)

何のための教育？

もっとも印象に残ったのが「村で不便を感じるのは病院と学校だけだ」という話でした。小学生から高校生まで山のふもとの学校に通わなければならないし、病気や怪我の時には自動車で40分ほどかけて下の病院に行く必要があり大きな負担になっています。でも、それ以外のことで不便だと感じることはないそうです。都市部に近く、移住者も多いことはその証しかもしれません。

明治に開拓された童仙房は、決して豊かとはいえませんでした。子どもは日雇いや農作業の手伝いなどで働かなければならず、村から出ていくということはありませんでした。その結果、後継者が地域に残ったと言います。地域が以前より豊かになると、子どもを学校に通わせることができるようになりました。やがて、子どもは村を出て町で働くようになり、後継者不足に悩まされるようになります。少しでもよい教育を子どもに与えてやりたいとする親たちの熱意が、地域の将来にとってよいとはいえない結果を生んだのは皮肉なことで、教育は、誰のため、何のために、とあらためて考えさせられました。

(辻誠士郎)

「あなたたちは何かと比較しようとしている」

近世から続く野殿の歴史は、童仙房との比較において興味深く、今回、野殿の現在につながる歴史(=通史)の聞き取りを行いました。天台宗常念寺の末寺であった福常寺が、江戸時代中期に智積院による布教で真言宗に改宗したことや、その福常寺で寺子屋式の教室が開かれたことなどの話を聞くことができましたが、そこで語られた多くは、各家庭の生活につながる歴史、つまり生活史でした。一般的に個々の生活史とは普遍化できないものとされ、普遍性をもつ通史こそ「歴史」であると考えられてきました。しかし、通史とは、人の数だけ存在する生活史の中から、恣意的に史実を寄せ集めてつくった物語です。従って、何を重要だと考えるかによって、また史実をどう解釈するかによって、通史は変更が加えられてきました。だとすると、歴史が持つと考えられてきた普遍性とは幻想ではなかったのか。今回、あるお宅での聞き取りで「あなたたちは何かと比較しようとしてる」とももの見事に指摘され、自分たちの意図を見透かされたような後ろめたさを感じました。

(横田航)

京大と野殿・童仙房

個性が個人に内在するのではないように、地域の特性も所与のものではありません。それはあくまで「他者」との比較であって、即ち、実体を持たない幻想です。野殿・童仙房もしばしば、歴史を「持つもの」と「持たざるもの」というコンテクストに位置づけられ、認識されてきました。しかし、もしそれが幻想であるならば、その認識とは見る者の内面を映し出していると言えないのでしょうか。私たちは、自分自身が他者の中に見たいものを、他者に投影してしまします。従って、我々が認識する他者(像)を通すことによって、我々自身を知ることが可能だともいえます。

今回、私たちが野殿・童仙房を通して見たことが、自らに返ってきて問うたように、野殿・童仙房の人々も京大との交流を通して再発見があるのではないのでしょうか。京大が訪れることによって生まれた野殿・童仙房との交流により、それぞれ自身へのより深い自己認識がもたらされると考えられます。それが、京大が野殿・童仙房を訪れる理由の一つではないのでしょうか。

(横田航)

人 eX 自然 eX 伝統 = ? ? ——院生の野殿・童仙房体験記

京都大学グローバル COE プログラム「こころが活きる教育のための国際的拠点」では、今年度より大学院生初年度教育の一環として、「EXラボ」という企画を開始しました。この企画は、大学院初年度に自らの専門分野とは異なる領域の研究現場への参加を通して、多様な方法論への理解を深めることを目的としています。提供された5つのプログラムのなかのひとつとして、「経験知と学知の境界線を越えて」というテーマで「野殿・童仙房フィールド研究体験」(9月27日~28日)が行われました。7人のお互いに異なる関心と研究領域をもつ大学院生が初めて野殿・童仙房を訪れました。地域で生きる人々と接し、お互いに交流・議論するなかで、それぞれの研究そのものを見つめなおす機会にもなったのではないのでしょうか。

劉 昕 Xin LIU 教育学研究科修士1回生 藤村彩夏 Ayaka FUJIMURA 教育学研究科修士1回生
塩原佳典 Yoshinori SHIOHARA 教育学研究科修士1回生

日本—京都—不思議な異空間、野殿・童仙房

私は今年の4月に京都大学大学院に進学し、京都に引っ越してきました。京都は日本らしい都市と知られ、数多くの神社や寺もあり、外国人にとって非常に楽しいところです。このたび、京都大学教育学研究科の生涯教育学講座の案内で京都府の野殿・童仙房を訪れ、茶畑、滝、山、いのしし、夜空にきらきらとまたたく星たちなどに触れることができました。

私たちが訪れた日は、丁度「生活クラブ大阪」の方も子供の教育のためにこの地域を訪れていました。2歳から5歳までの子供と遊び、子供の天真爛漫な笑顔に触れることで私は、自分の子供の時のことを思い出しました。遊びは子供にとって、一番楽しいものです。疲れを知らず、一所懸命に遊ぶ子供たちを見て、私たちの研究もそういうものではないかと思いました。私たちにとって研究が一番楽しいものはずです。子供のように疲れを忘れ、研究に励みましょう。

(劉昕)

異空間と研究

京大生はなぜ野殿・童仙房を訪れるのでしょうか。研究対象として野殿・童仙房を見ているからでしょうか。自然と触れ合いたいからでしょうか。もちろんそれもあるでしょう。しかし本当にそれだけでしょうか。



研究する目的は人さまざまです。ただ、本に囲まれた研究室にいるばかりでは、ときにその目的を見失ってしまうことがあります。いったい何のために研究しているのだろう、この研究は独りよがりなものになっていないだろうか、と壁にぶち当たることがあるのです。野殿・童仙房は他の地域にはない独特の歴史を持っています。そのような地域に住む人々と語り合うことで、彼らの思いを知り、自分の思いを知ってもらい、そういった交流の中で、あらためて研究の意義を問



い直すことができるのではないのでしょうか。野殿・童仙房では、本に囲まれた研究室にただいるだけでは決して得られないものを得ることができます。それは実体のないものかもしれませんが、でもその魅力に惹かれて、京大生はこの地を訪れるのではないのでしょうか。

(藤村彩夏)

「伝統」と「故郷」の再発見

童仙房は明治になって開拓された土地です。それは、江戸時代との断絶という意味で、「伝統」を持たない土地であるとも言えるでしょう。私はこの点に、童仙房と京大とのひとつの接点を感じました。

「伝統」とは、その土地の住民が、「故郷」や「郷土」のような意識を獲得する上でひとつの契機となるものです。それでは、京都府の開拓計画のもとでこの土地にやってきた入植者たちは、どのように「伝統」を作り出していったのでしょうか。特に、童仙房では祭礼行事や地域史の編纂といった、「伝統」を生み出すための仕組みがどのように行われてきたのでしょうか。

このように、ご自分の「故郷」をどのように思っておられるかを私たちに存分に語っていただきたいと思っています。それは、「故郷」の再確認・再発見につながるという意味で、この地域の方々にとっても「生涯学習」の契機となるでしょう。同時に、地域社会における教育という問題を考える上でも、興味深い研究課題であると思います。このような活動は、他者としての京都大学とこの地域との関わり方のひとつとして、意味のあることではないのでしょうか。

(塩原佳典)

なお、同プログラムには、坂上元太(教育学研究科修士2回生)、瀧上浩一郎(教育学研究科修士1回生)、鈴木伸尚(人間・環境学研究科修士1回生)、グエンティ ホンハウ(教育学研究科修士1回生)が参加しました。また上記の執筆に当たっても協力を得ました。

